○「地域幸福度（Well-Being）指標」を活用したまちづくり

・取組団体：福島県会津若松市

・取組内容：会津若松市では、デジタル田園都市国家構想交付金事業をはじめとする「スマートシティ会津若松」の取組による効果を数値化・可視化する指標として、「地域幸福度（Well-Being）指標」（以下「LWCI」という。）を活用する取組を進めてきた。
今回はその中でも、令和４年度に開催した「LWCI ワークショップ」（以下「ワークショップ」という。）を中心に記載する。

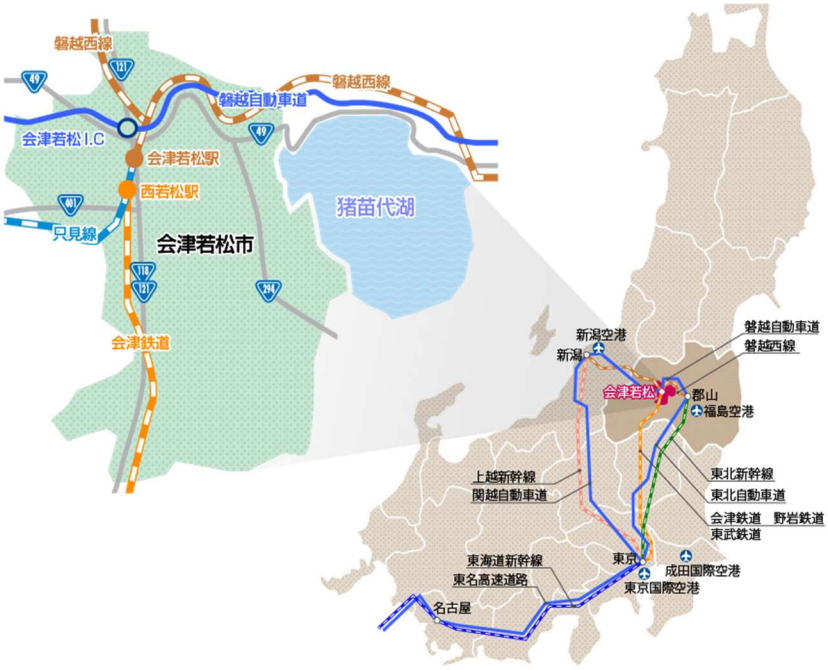
１．福島県会津若松市の概要

人口：114,335 人（令和５年１月１日時点）

職員数（市長部局）：969 人（令和３年４月１日時点）

総面積：382.99 ㎢

図表１　会津若松市の位置図



出所：会津若松市ホームページ

２．取組の背景・目的・内容

（１）　ワークショップ開催の背景

LWCI は、会津若松市が設立当初から賛助会員として参画している一般社団法人スマートシティ・インスティテュート（国内外のスマートシティに関する最新情報や推進ノウハウの収集・分析・共有等を行う非営利型の一般社団法人）が各種国際指標や学術研究による知見などをもとに、市民が感じる幸福感や生活満足度などを数値化・可視化するために作成・開発・公開しているもので、市民を対象としたアンケートによる主観指標と、各種統計等に基づく客観指標

を組み合わせて、「医療・福祉」、「子育て」、「環境共生」、「雇用・所得」など、市民の幸福感や生活満足度などと一定の相関関係にある24のカテゴリーで数値化されている。

会津若松市では、「スマートシティ会津若松」が将来に向けて持続力と回復力のある力強い地域社会と、安心して暮らすことのできるまちづくりを進める取組であることを踏まえ、地域全体におけるWell-being向上に向けて、市職員向け研修会を開催するなど、全国に先駆けて活用に向けた取組を進めてきた。

（２） ワークショップの目的

- 市民等の意見を幸福シナリオライブラリーに反映し、それに紐づくWell-being実現に向けたKPIを策定・進捗管理することで、利便性や幸福度合いの向上をより市民目線で評価する。
- 意見交換を通して市民一人一人に取組を自分事化してもらう。また、取組に興味・関心を持ってもらうことで、今後の積極的な参加を促し、市民と一体となって取組を推進。領域や団体で影響力・発信力がある関係者が参加することで、スマートシティの取組の情報発信・普及啓発の効果を期待する。
- 市民等と意見交換をすることで、WGのメンバーにも市民目線のWell-beingの実現を自分事化してもらう。また、市民等と認識合わせした幸福の実現に向け、収集した現場の声・意見を参考に各取組の今後のサービスの拡大・改善に活かす。

（３） ワークショップの内容

ワークショップは、令和４年12月、スマートシティ会津若松の取組に積極的に参画する市民が参画している「スマートシティサポーター」や、地域の業界団体により構成される「スマートシティ会津若松共創会議」のメンバーをはじめ、市民や地域企業、ICTオフィス「スマートシティAiCT」入居企業等を対象に開催し、約40名が参加した。

ワークショップでは、会津若松市が「スマートシティ会津若松」の取組の中で、令和４年度にデジタル田園都市国家構想交付金を活用してデジタルサービスの実装に取り組んだ６領域（行政、観光、決済、防災、食／農業、ヘルスケア）ごとに参加者をグループ分けした上で、下記の流れで開催し、LWCIを活用して把握した市の現状や課題の分析をもとに、グループごとに、求められる改善策や目指すべき姿をワークアウトプットとして発表した。

図表２　ワークショップの全体像

出所：LWCI に関する報告書（会津若松市）

ワークショップの成果の一部を以下に記載する。

- ワークショップにおいては、LWCI を活用して把握した会津若松市の現状を「会津全体の強み」「会津全体の弱み」「各領域の強み」「各領域の弱み」の４分類で洗い出し、課題の分析・スマートシティの効果分析・今後に向けた意見交換を行った。
- 観光領域を担当したグループからは、「豊かな歴史・食・自然がある一方で、アクセスや提供する施設・環境、PR の改善が求められる」という課題の分析から、魅力あるコンテンツの創出・発信と、混雑・渋滞等の機会損失を防ぐことで、若い世代を中心とした観光客の増加とファンの創出を目指すという方向性が示された。
- また、防災領域を担当したグループでは、「避難訓練等の災害への備えを行っている一方で、独居老人や空き家対策が課題として残る」という分析から、災害時の連絡手段を確保するとともに、日頃から市民一人ひとりの防災意識を高める取組が求められるという方向性が示された。

３．成果・課題

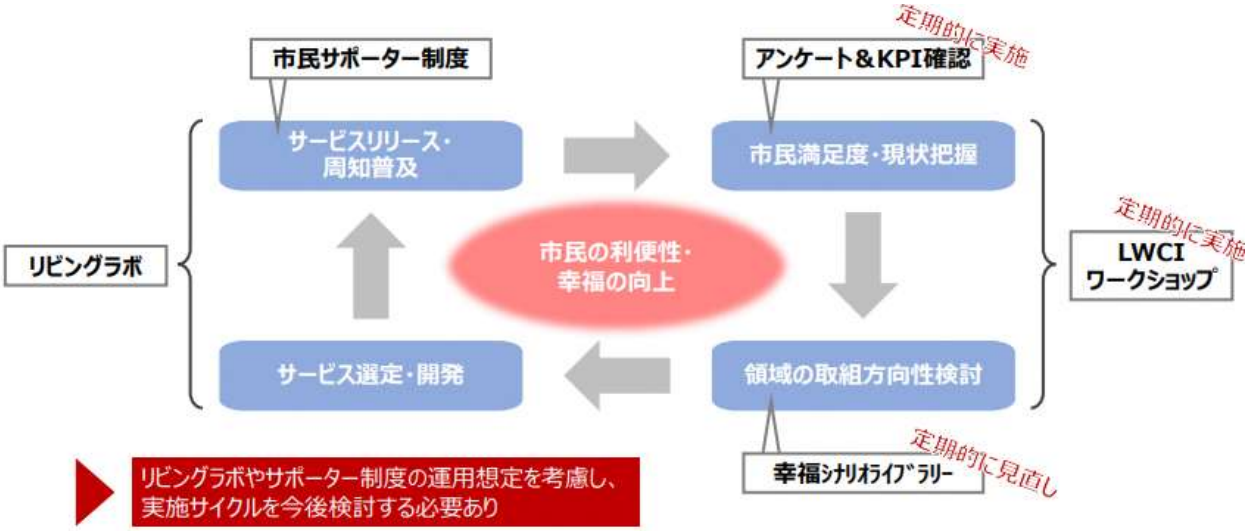
（１）　成果

「スマートシティ会津若松」の取組により実装されたサービスが自分たちの生活・暮らしの well-being 向上にどのように寄与しているかを把握することで、一般市民にも取組に対する興味関心を促すだけでなく、既存のサービスだけではカバーしきれない諸課題に対して、その解決を図るための新たなサービスや取組を市民とサービサーがともに考える一助となるのが、ワークショップ形式の利点であると言える。

今後、会津若松市では、市民に利便性や会津で暮らすことの幸福を感じてもらえる地域 DX を目指し、図表３に示す４つのステップを踏まえるとともに、それぞれのステップの中で「スマートシティサポーター」制度などのさまざまな仕組みを活用しながら、「スマートシティ会津若松」の取組を推進することとしている。市民や地域企業、ICT オフィス「スマートシティ AiCT」入居企業等を巻き込んだワークショップもサイクルの中に含まれているが、「今後もこの

ようなワークショップを定期的に実施して欲しい」という市民の声は、１つの成果と言えるだろう。

図表３　市民の利便性や幸福の実感・向上を目指すスマートシティ会津若松の進め方



出所：LWCI に関する報告書（会津若松市）

（２）　課題及び今後の展望

会津若松市では、令和５年度も LWCI を活用したワークショップを開催し、生成 AI を活用した新たな取組を行った。

この中で、「スマートシティ会津若松」の取組において、デジタルサービスの普及・拡大に取り組んでいる４領域（行政、エネルギー、決済、ヘルスケア）を抽出し、それぞれの領域における市の課題について LWCI を活用して把握し、生成 AI に課題をインプットさせる。その上で、これらの領域における解決策やソリューション、さらには、それらの解決策やソリューションのタイトルやイメージ図までを生成 AI にアウトプットさせるという新たな手法を取り入れた。

今回のワークショップも、市民や地域企業、ICT オフィス「スマートシティ AiCT」入居企業等を対象に開催し、参加者からは、「生成 AI を活用することで、自分では思い浮かばなかった、納得感のあるアイデアが短時間で出て盛り上がった」という意見も出るなどおおむね好評であったが、一方で、参加者が約 20 名であり、Well-being や LWCI への関心や知名度の低さが伺えた。

こうした背景もあり、会津若松市では、令和６年３月に策定した地方版総合戦略「第３期会津若松市まち・ひと・しごと創生総合戦略」において、地域ビジョン「『暮らし続けたいまち』会津若松」の実現に向け、「既存産業・資源を活用した魅力的なしごとづくり」や「結婚・出産・子育て支援と教育環境の整備」などの基本目標に基づいて進める事業効果の見える化を図るため、毎年度、関係する LWCI の変動を把握することで進行管理を行うこととした。

これにより、会津若松市では、「スマートシティ会津若松」の取組だけでなく、地方創生の取組全体にLWCIを活用することで、「地域幸福度（Well-being）指標」を活用したまちづくりをさらに進めることとしている。

【参考】

・会津若松市の地域幸福度（Well-being）指標について（会津若松市ホームページ）
https://www.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/docs/2023070600053/

・一般社団法人スマートシティ・インスティテュート　Well-Beingアンケートダッシュボード
https://www.sci-japan.or.jp/LWCI/index.html